

特定中山間保全整備事業「南富良野区域」
効率的整備手法検討第三者委員会（第2回）
議事録

日時：平成19年8月20日（月）13:30~15:30

場所：農林水産省 共用第8会議室

事務局：ただいまから特定中山間保全整備事業「南富良野区域」効率的整備手法検討委員会の第2回の第三者委員会を開催させていただきます。

最初に、農林水産省農村振興局農地整備課長から、挨拶申し上げます。

<農地整備課長挨拶>

<事務局より出席者の紹介>

事務局：柿澤委員と黒河委員からは、ご欠席との連絡をいただいております。

事務局として農林水産省、林野庁から参加しております。また、オブザーバーとして、緑資源機構に出席をいただいております。

議事の進行につきましては梅田委員長にお願いします。

梅田委員長：議事次第のタイムスケジュールをなるべく守るように、ご協力をお願いします。

では、資料の説明をお願いします。

<事務局より資料の説明>

梅田委員長：どうもありがとうございました。今のご説明について、委員からご意見をいただきたいと思っております。よろしくをお願いします。

斉藤委員：資料2の2ページですが、これは特に直すということではないかもしれませんが、「鳥獣被害の面積や被害額の変動」のところでももちろん面積と被害額は結構数字に出て分かりやすいのですが、鳥獣被害というのは限りなく心情的なものです。要するに、被害と思うかあきらめるのかというところがかなりあって、被害というものを地域の人々がどのように認識していたのか、例えばアンケートでもいいので情報をとれると良いと思います。

例えば現地で私が情報をお聞きしたときに、お年寄りの方は多少、「クマやシカに食われてもしょうがない」と思っています。ところが担い手では、

面積あたり幾ら補助金をもらえるか、という話になってくる。そうすると、被害というのは単純に被害面積や被害額で統計がとれるかというところではなく、その被害を感じている人たちの意識の問題が大きく影響している。私はフィールドが長野なのでカモシカの被害があるのですが、被害というのは意識に大きく影響する。やはりこのような中山間の総合整備をやったときに、営農の在り方や、地域住民の暮らし方を考えたときに、野生動物との付き合い方のようなものを大きく構えるのか、「幾ら補助金をもらえるから、どんどん被害額を出せ」というようになるのかは、かなり重要なところだと思います。

ですから、単純に数字としては被害面積や被害額、シカを有害鳥獣駆除で何頭とったということが出るのですが、その背景にある地域の人たちが農作物被害について、シカやクマに対する気持ちとしてどのように考えていたか。それが多分年代や世代、それから社会情勢によっても変わっていくと思うのです。きちんと両方の記録を残しておく、単純に数字の増減だけではなく、評価できるのではないかなと思います。

梅田委員長： 確かにどこまでを被害と感じるか。私なども北海道の農家の人の話を聞いていると、カボチャなどは山に植えた3割まではいいと言っています。それは、シカやクマにあげるものだ。けれども、「7割しか残らなかった」と、嘆いている人もいます。その辺のところは難しいところだと思います。

だから、その辺のことは、いろいろなところで地元の方と話し合いをしていくしかないと思います。ただ数字だけで言うと、今お話があったように「被害額を出せばいい」ということになる。ちょっと言葉は悪いですが、モラルハザードを起こす可能性もあるのではないかと、逆にこのような仕事をやることによって。そのような気もする。

宮城委員： 鳥獣害防止柵をつくってただ仕切ってしまう。それを逆に言うと、もしかしたら人のほうが閉じ込められてしまうような状態にしてしまうのは余りにももったいないというような気がします。何かもう少し開放的な、あるいは外から来た人にとっても、あの空間が大事な財産であるということがわかるようなことにならないのかと、ずっと考えています。

畑と林地の間には空間が本来はあったというお話を伺ったのですが、北海道もそうなのです。何か、人が関わる場所と林地の間に、ある程度の空間をつくっておけば、そこで被害を食い止める可能性がある。だとしたら、そのようなところこそ、逆に外から来た方たちが喜ぶ、景観を楽しむために歩く回廊空間というようなことはできないか。ちょっと夢のようなことかもしれませんが、防止柵でただ区切る対応というだけではない村の景観づくりを絡めて考えていかなくてはいけないと思います。

齊藤委員： 現地で感じたのは、クマの気持ちとすれば、森林にいるつもりで目の前の餌場に行こうとする際、いきなりフェンスがあったら、それを倒して行くことになると思うのです。

農地の一番端しかフェンスを張れないということがあるのかもしれませんが、北海道のような雄大な地域で景観とか村づくりのようなことを考える場合はやはり、森林が終わると少しバッファーがあり、「ここから先は人間がいるのかもしれない」というようにクマがある程度認識して、しばらく行くとフェンスがあるということであれば、やはり学習もするでしょうし、わかるようになります。多少「人間は怖いぞ」と脅迫するのが一番いいのですが、それができなくなれば、クマやシカに対する教育的効果ではないですけども、やはり、林地と農地の間には柵があって分かれている、というのはわれわれにも分かりにくく、ましてやクマやシカはほとんど分からない。そのようなことが、今、宮城委員がおっしゃられたようなことにも関連してくるのだらうと思います。

せっかく林野と農水の両方で実施している事業ですので、例えば造林して森林材をとるところと、名目は林地だけれども木が生えてなくてバッファーになっているところも、農地と林地と、それを総合した特定中山間整備というように考えると、いろいろやり方があるのかもしれないと思いました。

梅田委員長： 北海道には内地でいう里山、いわゆる、人間が入って人間が手を加える山というものはないのです。人間はもう、精いっぱいのところまで畑を作りギリギリの仕事をしているので、あとはもう山になってしまう。そのところが、今、先生が言ったような難しいところです。

酒井委員： 今のシカ柵に関しては、先進事例のところにいろいろ話を伺いに行くということですが、隣の富良野市の麓郷地区はもう柵を造っていて、ここが非常に参考になると思います。例えば台風が来て木が倒れてシカ柵を壊しそうな木などは事前に切って、ある程度柵と森林の間に空間をつくってあげると、後々維持管理が楽になってくると思うのですが。

恐らく、シカ柵の管理組合ができ、どこが管理して、その予算はどうするかという議論がこれから出てくると思うのですが、やはり、予算のあるうちに維持管理費のかからない仕組みをつくっておく。例えば事前に老齢木は伐採しておく、後々楽かなと思うのです。

梅田委員長： 柵の向こう側に少し、管理エリアのようなこととか。

酒井委員： かつて計ったことがあるのですが、大体台風が1回来ると、2 kmに1本ぐらい木が倒れます。そうすると、1本当たりの処理費用が10万円ぐらいか

かる。保険には入っているのですが、やはり延長に比例してお金がかかってきますので、事前にそのような木がなければ、10年とか数年は維持管理費がかからないと思います。このようにいろいろ情報を集められたらいいと思います。

梅田委員長： そのような話は、現地の方たちのところでやっていただけると一番いいですね。

斉藤委員： 僕も現地で見たときには、確かに森林ぎりぎりまで農地が来ていて、森林と農地の間に柵があったところもありますが、そうではないところは多分、シカなどがジャンプできないように、農地があっても少し余白を設け、そこを深くしている。あれは逆に言うと、柵を少し内側にして、農地の外周を無駄にしているわけです。

あまり固定的に農地をくくるのではなく、やはり農地の中が少し狭くなくてもバッファー、の設置を考えてはどうか。今、おっしゃられたように、管理の問題も含めて色々あるでしょうから、中側はふさがれても、外側はふさがれないということになるとまずいでしょうから。

酒井委員： 農家の方からいえば、「なるべく畑の内側には柵は入らないで」ということになりませんが、そこはやはり、森林所有者に多少理解していただいて、ということになると思います。

実は、柵があって出られないシカがいて、そのシカを見ているクマがそのちょっと奥にいるという形になっている。シカを駆除した際、クマはシカの代わりに今度は人を見るようになるというように、やはりいろいろ先を読んでいないと危ない問題があると思います。柵と森林の中は多少見通しがいいほうが、人から見ると安全かなと思います。

梅田委員長： もう少し、林の中もこちらから見えるようにということですね。

酒井委員： これはブラックジョークなのですが、全部森林を柵で囲ってシカが出られないようにする。どこかからシカが出たときに、今度はシカが森林に戻れず、畑にシカがいて、結局森林の樹木が保護されて畑のほうにシカが行ってしまうということがあります。実際に柵をつくっても戻れないシカが出てきて、それが畑を踏み荒らしていくという被害が起きてきますので、その辺は猟友会の方と相談して、畑に出たシカの駆除なども必要なと思います。

酒井委員： 資料2の5ページですが、ここは北海道の石狩川、空知川の水源で、水源林のかん養と流出土砂の防備は大事だと思います。特に下流に金山ダムがあ

るのですが、南富良野の土壌は火山灰土壌で、非常に雨の浸食を受けやすい。水源地で非常に浸食を受けやすいことから、この谷止め工が非常に重要になってくると思います。シカ柵だけに間伐材を使うのではなく、例えば谷止め工にも使用して畑の土壌浸食を極力抑えていく。

例えば谷止め工がどのくらい必要で、木材にして何立方将来必要かという計算を行い、北海道の水源地における中山間の整備において、意義付けをしていただければと思います。

欲を言えば、農業が栄えて森林が整備されるという、そのような筋書きができる就非常に、特にこの南富良野町の場合には意義が大きくなると思います。

梅田委員長： 資料3の10ページに谷止め工の絵があります。僕はこの近くで昔仕事をしたことがあります。地形的に谷止め工がものすごく必要になり、そこはフトンかこの計画だったのですが、大変でした。ここの水が溜まるようなところに、ほ場が開かれたけれども、河畔林とまではいかななくても木を少し植えたほうがいいのではないかと。

酒井委員： 水だけ抜けて、土を止めることのできる工法もあると思います。全部ふさいでしまっても、水は逃がす。

梅田委員長： 水を逃がすのは、当然ですけども、そのところに少し木でも植えるようにしたほうがいいのではないかと。

酒井委員： いろいろケース・バイ・ケースで、機構の幹線林道の工事現場などで、そのような、土砂が河川に流れない工法のノウハウはあると思うので、そのようなノウハウを応用されたらいかがかと思います。

梅田委員長： 現場では、排根線を低いところへ移すという話と、このようなものを組み合わせるようにしていかないと。

酒井委員： 逆に、ここで何らかの技術開発ができてほかに波及すれば、この事業の意義もあると思います。

宮城委員： 現地でも申し上げたのですが、先ほどのバッファの話などもそうですが、農と林と一緒にやるところが、特定中山間保全整備事業で非常に大事なことになるのです。工種別の効果だけでなく、この地域でこの工事期間内に農と林が一緒にやることで、このような効果が総合的に生まれてくるということが、後々評価できるようにしてほしい。定性的な評価をするために情報を集める

ので、重なってくるかと思うのですが、ぜひその点をこの事業で整理していただきたいと思います。

それから、やはりこの事業には、多くのお金がかかることは事実なので、それがモデルになるようにしていただきたい。鳥獣害についても、既にある施設を地元の方々に見ていただいてということもあるとは思いますが、ただ「柵を作りました」ではなく、その柵を作るときに幾つか考えられる試みをやってみて、例えば「これがいい」ということがわかりましたということが、この事業の効果として出てくるといいと思います。

もしかしらそのためには、一律の方法ではないほうがいいというような気もしますが、わたしも、具体的な方法はよくわからないのですが、ご検討いただけたらと思います。

緑資源機構： 鳥獣害防止施設について、クマが出没するところであれば、シカだけでなく、クマのことも考えた対策をしようと考えております。対象とする動物や、農地と林地の間がどれだけあるのかなども考慮して、一様なものにならないようにしていきたいと思います。

梅田委員長： そうですね。あの地区の方たちは、かなりクマ、シカと共生しているというか、向き合って暮らしている感じがあるので、そこはまたご意見を聞きながら事業を実施していくのが一番だと思います。

ほかに意見がなければ、これでまとめてもらうことにしますけれどもよろしいですか。ではこれで、意見交換は終わりにします。どうもありがとうございました。

<第三者委員会の意見とりまとめ>

事務局： 議事録等の確認につきましては早急に整理の上、皆さまにご確認をお願いしたいと思います。

資料の公表につきましては、若干本日の指摘等を踏まえて修正し、委員長に確認をしていただいた上、公表という手続きをとりたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

本日は長い時間、ありがとうございました。